

2025/11/16

薬害根絶フォーラム 筋短縮症の被害と訴え

駒井雄次

私が「大腿四頭筋拘縮症」という言葉を知ったのは、ずっと後になってからのことでした。幼い頃から「歩き方が変だ」「走り方がおかしい」と言われ、親も心配して病院へ連れて行ってくれましたが、当時の医師たちは原因がわからず、ただマッサージを続けるだけでした。治療と称して受けたマッサージは痛みばかりで、良くなるどころか、足の動きはいつこうに良くなりませんでした。幼稚園児の自分には、なぜ痛い思いをしても治らないのか、ただ不安と恐怖だけが残っていました。

小学校に入ると、体育の授業が苦痛の時間になりました。

体育座りをするだけで太ももが突っ張り、跳び箱やマット運動などは恐怖でしかありませんでした。閉脚跳びができず、足が思うように動かないことで、周囲から笑われることもありました。それでも幸いだったのは、同じような症状を持つ子が何人かいたことです。

病院で同じ注射を受けた子どもたちが同級生や下級生におり、いじめられることはほとんどありませんでした。

今振り返れば、それはとても恵まれた環境だったと思います。

しかし、身体的な不自由は日常生活にも影響を及ぼしました。

足が棒のようにしか動かず、転んだり、他の子にぶつかったりして怪我が絶えませんでした。両脚に力が入らないため、走るのも遅く、ボールを蹴るのも障害が軽い右足ばかりでした。運動ができないことを責められることはなかったものの、心の中では悔しさと悲しさが常にありました。

外で思い切り遊びたくても、親が気を使い「無理しないで」と止める姿を見るたびに、自分の足を恨むような気持ちになったこともあります。

中でも一番嫌だったのは、学校行事のスキー教室です。

悪い足では板をうまく動かす事ができず、転倒を繰り返しました。先生の厳しい指導に耐えながら、「自分だけができない」という劣等感に押しつぶされそうでした。

その記憶が尾を引き、大人になるまでスキーに興味を持たなかったのですが 30 歳を過ぎてから再び挑戦しようとしたが、左右の動きの違いでバランスが上手く取れず、結局は途中で諦めました。

水泳でも同じです。

特に平泳ぎの足の動きができず、友達がスイスイと泳ぐ姿を見ては、悔しさで涙が出ました。どんなに努力しても足が言うことを聞かない——それが現実でした。

この病気の原因は、幼少期に受けた筋肉注射にありました。

1950年代から70年代にかけて、医療現場では薬剤を筋肉注射で投与することが当たり前のように行われていました。

だがその中には、筋肉を固くし、可動域を奪う成分を含むものがありました。

それが「大腿四頭筋拘縮症」を引き起こしたのです。

全国で多くの子どもたちが同じように被害を受けました。

自分が小学生の頃、被害者やその家族たちは立ち上がり、「子供を守る会」が発足しました。厚生省（当時）、医師会、製薬会社を相手に裁判が起こされました。

しかし、20年近くに及ぶ長い訴訟の末、国や医師会からの正式な謝罪も補償もありませんでした。

わずかに製薬会社からの一部和解金が支払われたただけでした。

被害者家族たちは資金難に苦しみ、裁判費用を賄うためにワインを販売して資金を捻出したこともありました。

それでも、諦めずに声を上げ続けた親たち、支えてくれた弁護士の先生方、そして全労済をはじめとする多くの支援者の存在があったからこそ、私たちはここまで闘い抜くことができました。この場を借りて心から感謝を申し上げます。

「京都・滋賀の子供を守る会」は結審とともに解散しましたが、その思いを引き継ぐ形で被害者の会を結成しました。

「二度と同じ被害を繰り返してはならない」という強い信念のもと、今もなお活動を続けています。新たに入会された方々の多くが、加齢とともに症状が進行している現実を訴えています。

注射を受けた部位の可動域は年々悪化し、それだけでなく腰や膝、背中など、他の部位にも影響が出ています。

私自身も例外ではなく、年を重ねるごとに足の動きが悪くなり、以前よりも歩くのが遅くなってきました。

薬害とは、単に薬の副作用による個人の不幸ではありません。

そこには、国の医療政策の怠慢、企業の利益優先、そして被害を受けた人々の声を軽視する社会構造が存在しています。

あの時、医師たちが「原因不明」と首を傾げて終わらせず、真摯に調査していれば、こんな悲劇は防げたかもしれません。

無知と無関心が多くの子どもたちの未来を奪いました。

私が訴えたいのは、「忘れないでほしい」ということです。

薬害は過去の出来事ではなく、今も形を変えて起こり続けています。

新しい薬や治療法が次々に登場する中で、再び同じ過ちを繰り返さないためには、医療現場と行政、そして社会全体が一人ひとりの被害の声に耳を傾ける必要があります。

大腿四頭筋拘縮症という病気は、私の人生に深い傷を残しました。

しかし同時に、支え合い、闘い続けた仲間たちの存在が、私に強さと希望を与えてくれました。

歩くこと、走ること、そして生きることの意味を考え続けてきたこの人生を、これからも同じ被害で苦しむ人たちのために語り継いでいきたいと思います。